

## 尻別文学歴史の会だより

蘭越町ホームページ版：6月号：(平成29年6月1日/隔月発行)

花一会図書館(地域資料委員会) 編集 / 尻別文学歴史の会 協力

電話・メールアドレス

0136(57)6085(FAX 兼用)

[hanaichie@voice.ocn.ne.jp](mailto:hanaichie@voice.ocn.ne.jp)

磯谷郡蘭越町蘭越町880-9

蘭越町コミュニティプラザ花一会

文：行方 洋子(尻別文学歴史の会)

蘭越人物往来

第二回 目名農場の平田敬信 (一)

時は、明治41年11月28日、所は、後志国磯谷郡中目名市街地の鉄道の駅(現目名駅)を見下ろす高台で、一つの頌功碑除幕式が行われた。前日までの風雪が嘘のように晴れ渡り、澄み切った秋空の下、碑の前に設けられた緑門には、交差した国旗が掲げられ、天空に日章旗、万国旗がはためいた。碑前に備えてある、紅白の鏡餅と神酒、そこに居並ぶ来賓を含め参列者総勢二百余名、音楽隊の演奏に誘われ整列した。

第四南尻別尋常小学校長 渡部嘉代記が、「平田翁頌功碑紀念」(明治43年)で記述しているところによると、主な来賓は、前田寿都支庁長、粟飯原陸軍大尉、足立寿都警察署長、阿部宇之八北海タイムス社理事、池田寿都税務署長、伊藤義道南尻別村戸長など重鎮で、札幌新聞記者の貴志忠徳の式辞をもって除幕式が始まった。

目名在住の医師高山豊機が目名農場組合長で東京在住の河瀬秀治の感謝状を代読し、河瀬が贈った金杯、金一封、昆布郵便局付属品などの贈答品一覧を披露した。目名農場長平田敬信の令嬢で13歳の平田フミが、高山の手伝いで除幕を行い、粟飯原寛が碑文を朗読した。東京や丹後、大阪など各地から送られてきた祝電が披露され天皇陛下万歳、平田農場長万歳を三唱して、場所を小学校に移しての立食酒宴、寄せ書きを贈り、さらに平田敬信を胸上げするなどして4時半ころようやく散会となった。



像肖君信敬田平

「平田翁頌功碑紀念」より転載

此の碑は、目名農場長平田敬信の功績を讃えるものである。農場長とは、農場主ではなく農場監督である。碑に刻まれた名前を見ると、篆額は、元宮津藩主本荘宗武の子、本荘宗義子爵、撰文は、陸軍大学校教授で陸軍編修の横井忠直、書は、明治の三筆の一人、日下部東作(鳴鶴)、刻は、代々江戸一番の名石工、廣群鶴となっている。

碑石は、内地に注文した一間もあろうかという大石で、到着して台車から降ろすのも大変、

高台に運ぶにも馬車二台を連結しなければならなかった。小作人たちの生活は、大変困難で、毎日の生活用品、食料品を買うにも、名駒や、磯谷まで足を運び、自力で運搬しなければならず、不便さと困窮の限界を超えていた。そこへ石碑建立の話である。監督の平田敬信が、一同に自分を表彰する石碑の建立を言い渡し、自ら陣頭指揮を執ったのだ。石碑の基礎石をお不動さんの裏山より運び出すのだが、これまた大きな石で、持ち上げるための道具、神楽棧(木製のウインチ)をまず作ることから始めなければならなかった。そして大勢でかけ声をかけながら、難儀してやっとのこと高台まで引いてきたのだった。

除幕式の当日、朝の七時から、総代以外の人々は、寺に集まり、紅白の幕を引き、餅まきの用意など、式場や会場を準備して、式が済み、来賓らが学校に場所を移すと、自分たちは寺に集まり折詰で祝った。「平田氏頌功碑除幕式の光影」(上野繁)参照

しかし、農場監督が、自分の碑の建立を思い立ち、かくも立派な碑を建て、界隈のお歴々、新聞各社(後志新報、札幌新聞、北海タイムス、小樽新聞、北海新聞、北世界、丹州時報に記事掲載)を集めて、農民に準備を命じて、盛大な除幕式を行ったとは考えにくい。

目名農場とはどんな農場で、その監督平田敬信とは、何者であったのか、この碑の謎に迫ってみたい。

目名農場は、明治29年に東京府武蔵国荏原郡在住の河瀬秀治ほか4名(神鞭知常、田代四郎、川村政直、宇津木茂太郎)が、後志国磯谷郡南尻別村字目名(現蘭越町)に、未開地304万余坪を貸付し、同年許可された(道庁古文書館)ことに始まる。翌30年から借地人の川村政直が自ら農場監督となり、小作人を入れ開墾に着手した。北海道植民状況報文(明治32年)によると、川村農場(当時の名前)は、目名川に沿い、延長2里にわたり総反別1008町歩余で、小作は、41戸である。この時点で、成功地はおよそ40町歩。しかしこの後、川村政直は、病気になり、ついに死亡するという経過の中で農場の開墾は行き詰っていく。明治32年5月新寺創立願の信徒総代として川村の名前が見えるが、それ以外に彼がこの地に残した痕跡を見つけるのは難しい。このままでは返地やむなしとなって、体制が一新されたようである。頌功碑文に刻まれた借地人の氏名が、同じ明治29年であるにもかかわらず河瀬、神鞭、田代、そして寺師宗徳となっていることについて、筆者は、疑問を解くことができずにいる。ともかく、農場監督が亡くなり不在となって、明治33年に監督に就任したのが平田敬信である。農場は、彼が就任して以降明治35年を皮切りに3回に分けて無償付与され、明治41年2月ついに全地無償付与となった。彼の碑は、成墾期限までの短期間にこの広大な農場を仕上げるという前代未聞の偉業を成し遂げたことを顕彰するものであった。

#### 平田敬信の略歴

平田敬信は、旧宮津藩士元締奉行 平田保右衛門の長男として安政3年8月8日丹後国与謝郡波路に生まれる。文久2年、藩校「礼讓館」に入学して数年後に明治維新を迎えた。「礼

讓館」は「文武館」と名前を変え存続していたが、明治4年の廃藩置県により宮津藩が廃止され、藩校も廃止されることになった。これから入寮して上級の学問に取り組もうとした矢先、藩校がなくなったので敬信は進路が閉ざされる。行き場を失った士族の子弟の中で向学心に富み、可能であるものは、元藩校教師が開く地元の私塾に行くか、京都にでて私費で遊学するなどしたが、平田敬信は大阪に出ていくことにした。折よく明治4年6月に「開成所」の新校舎が旧舎蜜局（せいみきょく）の地に完成し、生徒の募集があったからだ。「開成所」は、「坂府洋学校（何礼之校長）」を母体に「理学所」を合わせて前年に作られた官立学校で、東京の南校とともに文部省が管轄した。「大阪開成所」は、尾張・美濃・加賀・能登以西を管轄したので、生徒は遠隔地からのものが多く、敬信も寄宿舎に入って生活した。ところが1年9か月学び終えたところで、「開成所」は、官立外国語学校「開明学校」と改称・改変されることになり、敬信は、失望し、学業をやめ帰郷する。学業半ばで家に帰ったものの、家業とてなく生業の創設は急務であった。故郷丹後の宮津は、江戸時代から縮緬で知られ、繊維産業で栄えた町であり、大阪開成所時代のその空気に、繊維産業が今後将来有望であると感じ取った17歳の敬信は、綿花の行商をはじめた。

この頃、新政府の政策に士族も農民も不満を募らせ、国内には反政府的気運がみなぎり、明治7年、板垣退助らが土佐に「立志社」を創立、同年阿波に小室信夫らが「自助社」を設立するなど、自由民権運動の結社が作られていく。そして明治8年丹後宮津では、学習結社「天橋義塾」が設立される。敬信は、この時19歳になっていたが、最年少創立社員としてこの結社に参加することにした。

#### 「天橋義塾」

明治8年7月1日与謝郡宮津学校の一隅で開業式が行われた。当日の出席は、54名の生徒を合わせて90余名、与謝郡誌に、その成立の起源を見る。

「スデニ小学校を卒業セルモノ若シクハ小学校ニ通学シテ尚余暇アルモノノ為ニ一ノ学舎ヲ設置シ、郷里ノ子弟ヲ教育シテ自治独立ノ計ヲナサシメントセリ」すなわち、旧藩士族の子弟の教育機関で、敬信が、藩校がなくなり進路に困ったときにできていれば、大阪に行かずに済んだものであったろう。義塾の社員（生徒）は、「与謝郡中小学校教員ノ集合セル者ト、学齡外ニアリテ小学校教官トナランコトヲ志欲スルモノナド」にあるように小学校教員になることを目指していたからか、敬信は、入社と同時に豊岡県師範学校に入学した。そして学力はすでに十分あったためか、翌年4月には与謝郡宮津校に8等訓導として勤務を始



「天橋義塾の跡」の碑（宮津小学校）

めたのだが、同年 10 月には義塾に専念するために退職した。

天教義塾は、元礼讓館助教で山城国綴喜郡井出小学校の教師であった 22 歳の小笠原長道が、休暇で郷里に帰って、廃藩置県後職を失った元宮津藩士のみじめな生活、とりわけ藩校の廃止後、15 歳から 20 歳前後の少年が学問するところがなく「遊惰ノ風日ニ長シ」の姿を目にして、元藩校の学頭で宮津学校事務係の栗飯原曦光らと私塾の創設を計画したものであった。創立メンバーの中に、のちに目名農場の借地人の一人であり、初代目名農場長となる川村政直がいる。川村政直の生年は不明だが宮津藩時代の役職が小参事であるので、平田敬信より年長なのは確かであろう。

天教義塾は、豊岡県から開業許可が下りたのは、開業式から 3 か月後のことだった。「天橋義塾開業願」を豊岡県に提出したのは、小笠原長道で、彼は、丹後出身で阿波自助社を作った小室信夫の娘婿となり、11 月に小室信介と改名する。小室信夫は、「民撰議院設立建白書」の署名者の一人であり、自由民権運動家として知られていたもので、県はその観点から関心をもって注目していたと思われる。単なる学習結社というのはあり得ないかもしれないが、天橋義塾が民権結社の様相を現すのにそれほど時間はかからなかった。時あたかも、政府の地租改正の場当たり的なやり方に対する不満が、生活に苦しむ人々の反政府的感情を押し上げ、行政担当者でもあった義塾の幹部たちは、民衆の側に立って抵抗を示した。それに対して、豊岡県は、天橋義塾社長で十三大区区長であった鳥居誨を免職にするなど、次々と弾圧を加えていった。やがて明治 10 年 2 月西郷隆盛らが挙兵をして西南戦争が勃発すると、東京遊学中の小室信介は、「立憲政体ノ規模実践セラルルハ実ニ是時」と、汽船汽車を乗り継いで京都に入り、鳥居誨、元藩主の本庄宗武、実兄の小笠原長孝らと会い大久保利通らによる西郷暗殺事件の存否を話し合ったとされる。そして宮津に帰り義塾社員を集め、協議して、平田敬信、川原政庸の二人に因州へ偵察に行かせることを決める。平田らは、但馬、鳥取に行き、帰って「異状無之」の報告をした。このことで反政府運動を起こそうとしたとの嫌疑をかけられ、信介は、3 月 1 日京都府から召喚され拘留される。そしてこの時、平田敬信も、ともに捕らわれた同志 9 名の中において、京都府に拘置された。翌年信介は「禁固 30 日」の実刑になる（8 日間で保釈される）が、平田敬信は無罪となった。天橋義塾は、この経験から組織固めをする。明治 10 年 12 月「天橋義塾資本講規則」が作成され、在地の豪農商が「千人講」という形で株を購入し、義塾を経済的に支えることになった。

一方、地租改正に対して農民たちが持った不服不満を、元藩士たちで区長・副区長という職にあった天橋義塾の指導者が、創業の目的の一つ「民権暢達」でけん引していった。丹後と丹波の一部が、京都府合併になる中、地租軽減運動・地価修正運動へ展開を見せ、ついに明治 20 年、京都府知事 北垣国道は、各郡長（与謝郡・加佐郡・天田郡・中郡）に大蔵大臣の「厚義」により地価修正を行うという通達を出す。13 年間にわたる請願運動の勝利であり、それに貢献したとされるのが、丹後与謝郡出身で大蔵省主税局次長の職にあった神鞭知常だった。神鞭知常は、元丹後田辺藩士で、内務省・農商務省商務局長を歴任し、渋沢栄一らとともに「東京商法会議所」を結成した河瀬秀治と若い頃から非常に懇意であった。この

二人は、故郷の天橋義塾に対して強力な支援者であった。そしてのちに南尻別村の目名農場主になる人々であるが、平田敬信が、故郷の大成者である彼らとの知遇を得ていくのは、天橋義塾における彼の活動にあった。

明治13年の秋以降、自由民権運動は、昂揚していき、丹後においても頻繁に自由懇親会などの会合が持たれるようになる。同年4月には、宮津文殊前で中島信行を迎え、翌日には自由懇親会を盛大に開き、12月10日宮津智源寺において数十名が集まり、河瀬秀治も臨席する中、平田は中心となって熱弁をふるった。河瀬と平田のこの時の遭遇は、どれほどのものかわからないが、のちの農場主と農場長となる。その後自由民権運動そのものは、次第に衰退に向かうことになるが、明治15年10月平田は義塾で委員となり、立憲政党内に加盟する。やがていわゆる激化事件などもみられるようになると、これまでの指導者たちは対応統制の意思を失い、明治17年に板垣退助が自由党を解党し、立憲改進黨も同年12月大熊ら幹部が脱党し、明治16年の末より天橋義塾も解散が問題となる。平田は、明治16年、17年には、幹事・委員・審査委員となり、同時に会計も担当している。明治17年3月4日の義塾の常議員会・臨時会で、宮津に中学校を設置する件について話し合われた。天橋義塾では、創立以来、教育事業が系統的に行われてきたので中学校への引き継ぎに抵抗はなかった。ただし、中学校に義塾の家屋を寄付するかしないかについて、賛否分かれたが、結果は、同年9月の大会議で決することとして持ち越した。義塾の実質上の解散が決まるのは、9月の大会議においてである。

しかしこの場に、のちに目名農場初代農場長 川村政直と二代目農場長 平田敬信が同席していて、義塾の中学校への教育事業の移管と家屋の寄付について、意見が対立した。その様子から二人の性格・思いの違いがうかがえると思うので、長くなるがここに引用する。「宮津市史資料編第四巻206「臨時会議議事録」宮崎家文書」今西一より

(平田)曰ク、旧講新築講并セテ掛戻スレハ凡ソ五六百円ノ金額ヲ集金セスンハ負債ヲ弁償スル能ワス、故ニ該家屋ヲ無代価ニテ譲与ス可カラス、且ツ我義塾ハ明治八年ニ創立セシ以来社員諸君ハ幾多ノ醸金ヲナシ、十年ニ至テ二千余円ノ講ヲ結エリ、其際ニ当テ社員中ニ於テ重立タルモノ困難アリ、爾後今日迄本塾ヲ維持シ来レル団結ハ言語ニ尽シ難シ、然ルニ中学校ノ当地ニ設置スルカ為メ教育部ヲ譲リ并セテ家屋ヲ譲与スル等余輩ノ決シテ望ム所ニ非ス、若シ之ヲ寄付スルアラハ何ノ面目アリテ社会ニ見ヘンヤ、教育部ヲ譲ルモ彼ノ徴兵免役ヲ好ム卑屈輩多キニヨリ不得止讓ルノ見込ナリ、且ツ我塾ヲ以テ南山・盈科ノ両塾ニ比スルモノアリト雖トモ決テ然ラス、我義塾タルヤ自由改進黨ノ主義ヲ以テ結合シ、活発英偉ナル英材ヲ薰陶教育スルノ私学舎ニシテ、其名声ノ流布スルコトハ東京ノ慶應義塾、阿波(ママ)ノ立志社、次ニ我天橋義塾ヲモ并セテ三大義塾トモ称セラルトニ至ル程ナリ、加之ナラス資本モ十分ト称スルニ至サルモ此儘ニテ推ストキ八千六百余円ノ金額アリ、彼南山・盈科ノ両塾ノ如キ些々タル一学舎ヲニ(ママ)以テ南山・盈科ノ両義塾ニ比スルモノアリト雖トモ決シテ然ラス、我義塾ニアラサルナリ、豈ニ其為ス所ニ効テ徒ニ寄附ノ虚名ヲ張り官家ノ媚ヲ取ランヤ

(川原) 平田ノ説ニ賛成ス

(川村) 曰、当地ニ中学ヲ設立スレハ義塾ノ之ト勢力ヲ均フスル能ハス、随テ資本モ永遠ニ維持スル能ハス、去リトテ之レヲ寄附セントスレハ負債ヲ償却スルノ方法ニ苦ムノミ、然ルト雖トモ中学設立ノ事タル丹後地方ノ盛衰ニモ関スル事ナレハ、此理由ヲ以テ掛戻シ金ヲ請求シ止ムヲ得サルモノハ有志ノ人ニ就テ多少ノ寄附金ヲ依頼シ漸次償却シ去ルノ計画ヲナシ、以テ奇麗ニ該家屋ヲ寄附センコトヲ希望ス

つまり平田敬信は、教育を中学校に譲るのは仕方ないが、家屋を寄付することに、反対である、他の二つの私塾が、家屋を寄付しているので寄付するべきという意見があったのだが、天橋義塾を他の小さな塾と比較することに憤慨している。天橋義塾に対する強い誇りとそれを創立以来、献身的に支え、自由民権運動に青春をささげた自負がうかがえる。そして逮捕時の屈辱的無礼な態度で臨んだであろう官憲に対する反抗心の垣間見える語気に、聞いていた川原も思わず賛意を表した。川原も、平田と共に逮捕されていた。

それに対して、川村は、中学ができれば、義塾の将来はない、負債があるので寄付してしまうのも困る。かといって他所に中学を作られても困るので、社員や株主が協力融通して金銭の解決を謀り、家屋は寄付をするほうがいい、と多方面を考慮に入れた打開法を述べている。川村は、翌年1月の宮津中学校の開校式に与謝郡長として祝辞を述べることになるのだが。経験豊かな行政マンとして、あくまでも冷静沈着な判断ができる人物である。結局川村らの主張通り、家屋は寄付することで決着する。(以上天橋義塾の項参考抜粋:「宮津市史」資料編第四巻・「民衆結社の生成:天教義塾と叡麓舎」・「近代日本成立期の民衆運動」いずれも今西一著、「与謝郡史付録天橋義塾のあらまし」)

このような二人が、ずっと後になって北海道開拓に、同じ農場で、前後して挑むことになるとはこの時思いもしなかっただろう。

平田敬信は、天橋義塾が解散すると明治17年9月京都府へ出仕する。京都府属となったとき、知事北垣国道との面識の有無は不明ながら、この二人も後に農場主と監督という関係になる。

明治20年宮津の地価修正運動が収束して、明治23年7月第一回衆議院議員総選挙が行われた。丹後では、神鞭知常と小室信夫が争い、地価修正問題で実際に地域に利益をもたらすことに尽力した神鞭が勝利した。平田は、他の元天橋義塾社員たちと同じく神鞭派で、選挙応援演説など熱心に活動をした。

そして選挙前の3月4日、平田敬信は、京都府を依頼退職する。